

大鴉（おおがらす）

男が自分で気がつくより先に  
誰の眼が 彼の昼も夜も奪ってしまったか  
大鴉は知っていた  
なぜなら  
彼がしゃがれた声でつぶやき続けるのは  
陽を浴びる桜の幹の色をした 透子（とうこ）の瞳のことだけだ  
ったから

あやういところで

男は大鴉に

彼を見つめたことのない 透子の瞳を突き刺せと

言いつけてしまうところだった

ふみとどまったのは

唇をひらくその寸前に

雌のひたきの羽と同じ色の透子の瞳が

彼を狂わせたことに気がついたから

だのに大鴉は

無言の指図を読み

考えこんでしまった

林を流れる小川の底の色をした 透子の瞳に

この生きものも魅せられてしまっていたのだ

だから

大鴉は自分の漆黒の瞳を娘にやり

自分は盲（めしい）となって

命令者のもとへはばたいて帰った

嘴（くちばし）のあいだに

世にも美しいふたつの眼玉をはさんで